ロシア文学者平井肇の学業期

小学校入学から大学中退まで

金井美智子

ロシア文学者平井肇（一八九六―一九四六）による、ニコライ・ゴーゴリ作品の翻訳は、一九三四年から一九三九年にかけて相次いで出版された[1]。なかでも、岩波文庫に収録されている『外套・鼻』は、一九三八年の初版から二〇一五年現在まで増刷されている。平井は「ゴーゴリの名訳者として名高い平井肇」[2]と評されているものの、その背景は不明であり、翻訳リストさえ存在しなかった。たしかに平井は翻訳を通じて日本の文学に多大な影響を及ぼした人物ではないだろう。しかし、原作の力によるものが大きいとしても、『外套・鼻』のように現在でも読み継がれている翻訳を残した功績は大きい。平井の生涯をあきらかにすることは、日本におけるロシア文学発展史の一端をひもとくことにつながるといえる。そう考えた筆者は二〇〇九年六月から、平井に関する調査を開始した。しかし、当時確認できたのは日本近代文学館編『日本近代文学大事典　第二巻』[3]に収録されている平井肇の項目と、先述の『外套・鼻』（二〇〇六年改版）巻末にある平井の略歴と簡易な翻訳リストのみであった。これらは、平井の足跡を詳細にたどる資料としてはまことに不十分であった。

平井に関する調査が飛躍的に進んだのは二〇一〇年三月からである。平井の長女である山下ユリヤ氏から、おもに手紙で平

井についてお知らせ頂くことができたからである[4]。山下氏は平井の交友関係の中でも、とくに「畏友」[5]として、プロレタリア文学作家、貴司山治の存在を挙げられた。筆者は二〇一〇年五月より[6]、貴司の長男である伊藤恭治氏[7]からメールで連絡を頂けるようになった。伊藤氏からは、平井が一九二四年から編集に参加した雑誌『婦人之世紀』[8]の所在を教えて頂いた。さらに、伊藤氏が編纂にたずさわられた『貴司山治全日記DVD版』[9]は、早稲田大学中退以降の平井の動向をあきらかにした。これらの資料は、平井の生涯を再構成するのに非常に重要であり、翻訳リストと、平井の移動と交友関係を確認できる詳細な年表作成をも可能にした。しかし、紙数の制限があるため、本稿は研究ノートとして平井の学業期にのみ焦点をおく。学業期は平井がロシア文学ならびにロシア語と出会う時期であり、ロシア文学者となる平井の原点といえるからである。

一　小学校時代

平井は、一八九六年五月一七日岐阜県大野郡名礼村名礼（一八九七年から谷汲村）[10]に、山下氏によれば[11]、七人兄弟の長男として誕生した。父は炭治郎[12]、母は政乃。平井家は小作人を雇う裕福な農家であった。同村の谷汲山には西国三十三箇所最後の札所である天台宗華厳寺があり、名礼は華厳寺参道そばに位置した。

平井は名礼にある谷汲尋常小学校に入学した。入学年月は一九〇二年四月と考えられる。筆者が揖斐川町立谷汲小学校で閲覧した「永久保存版明治三十八年度谷汲尋常小学校卒業者名簿」によれば、平井が同小学校を卒業したのは一九〇六年であったからである[13]。当時の谷汲村には高等小学校が無かったため、卒業後の同年四月、揖斐尋常高等小学校高等科に進学した[14]。同高等小学校は名礼から直線距離で一〇キロ以上あった。『谷汲村史』によれば、同村では明治から大正にかけて乗合馬車が使用され、谷汲、揖斐間を往復していたことから[15]、平井はこの乗合馬車を利用し通学していたと考えられる。

二　中学校時代――御嵩町への移動、書生、進学

平井は、山下氏によれば[16]、高等科卒業後すぐ岐阜県可児郡御嵩町の杉田栄之助家の書生になった。それは岐阜県立東濃中学校に進学するためであった。杉田は岐阜地方裁判所管内御嵩地区裁判所書記[17]であった。平井家の土地登記に関する問題が杉田の協力により解決された経緯があってから、両家の交流が始まったという。

なお、揖斐尋常小学校高等科卒業年と東濃中学校入学年は資料を入手できず不明である。しかし、岐阜県立東濃高等学校が発行した『岐阜県立東濃高等学校新体育館完成記念平成十六年度同窓会名簿』によれば、平井は一九一六年三月に同中学校を卒業していた。そこで、仮に揖斐尋常高等小学校高等科を三年間の修業年限を経た一九〇九年三月卒業とし、東濃中学校卒業年の一九一六年三月から五年間の修業年限を引けば、一九一一年四月に同中学校に入学したと推察される。平井は杉田家に寄宿しながら二年間の準備期間を経て、東濃中学校を受験したと考えられる。

御嵩町は、中山道の宿場町として栄えていた。『御嵩町史通史編　上』[18]に掲載されている「大正時代の御嵩の家並み地図」（地図作成年月日の記載なし）によれば、御嵩町には東濃地域の官公庁や、東濃中学校をはじめとした文教施設があった。御嵩裁判所の隣には警察署があり、その周辺には代書屋や髪結い、飲食店、酒店、銀行、書店などが並んでいた。御嵩町は文字通り「村」ではなく、「町」であった。

平井は、一九一三年に出版された前田晁『短編十種　チェエホフ全集』を偶然御嵩町の本屋で見つけ「明治が大正に改まったばかりの頃」[19]に読んだ。これがロシア文学との出会いであった。その他に生田長江、生田春月共訳『罪と罰』を読み、坪内逍遥翻訳によるシェークスピアも読んだという[20]。それまでは「馬琴の「椿節弓張月」だの、種彦の「偽紫田舎源氏」といつた江戸時代の読物から、やうやく尾崎紅葉、川上眉山、柳川春葉といつた明治の通俗小説に移り、やがて田山花袋、徳田秋声、島崎藤村といつた現存作家の小説に現を抜かしていた時代」[21]を過ごしていたという。平井は中学校時代を「さうした作家のものを乱読しながら、いづれは自分も一連の小説家にならうといふやうな大逸れた野望を抱きはじめたロマンチックな少年の頃だつた」[22]と振り返っている。

こうした読書をへたことで平井は「中学を卒業すると私は真直ぐに早稲田の文科を志望し」[23]た。「いはゆる文学者（小説家）志望の連中は大抵英文科へ入学したものだ」[24]という。平井は早稲田大学で学ぶために岐阜から東京へ向かった。

平井にとって御嵩町への移動は大きな効果をもたらした。中学校進学にとどまらず、読書傾向を変化させる機会を得たからである。谷汲村時代は江戸時代の戯作や黄表紙などに親しんでいたのが、自然主義文学へと移り、ロシア文学と出会い、その他の外国文学も読むようになったのである。御嵩町で得た読書は、作家になりたい、という希望を抱かせることにつながり、早稲田大学英文科進学という選択を生み出すことになった。さらに、将来の伴侶と出会うことにもなった。杉田栄之助の長女、

静枝とのちに結婚することになるからである。

三　大学時代
――東京への移動、英文学からロシア文学へ

筆者は、平井が早稲田大学に在学した期間を示す資料を早稲田大学大学史資センターが保存する資料の中に確認できていない。しかし、平井による随筆「ロシヤ語二十五年」の中で、早稲田大学在学中のことを述べている部分（一五〇～一五三頁）さらに山下氏からの手紙[25]を参考に、先述した『日本近代文学大事典　第二巻』に収録された平井肇の項と、『外套・鼻』巻末に掲載された平井の略歴を照らし合わせて推察した。その結果、予科時代も含めた平井の在学期間は七年間と考えられる。平井は一九一六年三月に東濃中学校を卒業し、翌四月、早稲田大学高等予科英文学科入学。一九一七年四月、早稲田大学大学部文学科英文学専攻（以下、英文科）に入学した。英文科二年生まで進級したが、一九一九年四月に新設された文学科露文学専攻（以下、露文科）に再入学した。そして一九二三年（何月かは不明）露文科を中退したと考えられる。本節では、英文科の特色を振り返りながら、露文科で学ぶことになった理由とロシア語学習についてみていく。

当時の英文科は、たんに英文学のみを教えていたのではなかった。「英文科なるものが勿論、表看板の英文学が主要課目になつてはゐたが、その他に一般の外国文学を英語で読ませたり、講義をしたりする時間がかなりあった」[26]のである。『早稲田大学百年史』によれば「英文学科はむしろ英語をとおして学ぶ外国文学科、あるいはヨーロッパ文学科、領域の広い一般文学科だった」[27]のであり、「さまざまな授業が、英米のほかに仏、独、露、伊、北欧諸国に文学の傑作をまんべんなく扱おうとして」[28]いたのである。

英文科のロシア文学講義を挙げれば、一九一二年～一三年にかけて片上伸と相馬昌治[29]による「ドストイエフスキー研究」、吉江喬松[30]による「ゴルキー研究」、一九一三年～一四年にかけて片上による「露文学研究（ドストイエフスキー、ザ・ブラザーズ・カラマゾフ）」が行われた。一九一五～一六年には、昇直隆（昇曙夢）[31]が「露文学研究（ドストイエフスキー、レターズ・フロム・ゼ・アンダーグラウンド等）」を担当した[32]。

平井は「私はどういふものか、いつからとなく、英文学よりロシヤ文学に興味をもつやうになつてゐた」[33]と振り返っている。「といふのは、その頃からやうやく、米川正夫[34]、中村白葉[35]、昇曙夢の諸氏によりロシヤ原典から直接訳として次々とロシヤの小説類が翻訳されはじめたため、自然さういふ新刊の

翻訳書に親しむやうになつたためだと思ふ」[36]と述べている通り、当時は他言語からの翻訳ではなく、ロシア語原典からの直接翻訳が相次いで出版されるようになっていたのである。なお、昇の翻訳は一九〇四年に刊行されはじめ[37]、一九一四年には米川正夫による『白痴』[38]、一九一八年には中村白葉による日本初のロシア語からの直接翻訳『罪と罰』上下巻[39]が刊行された。明治末から大正初期にかけてのロシア語からの直接翻訳は、東京外国語学校（現・東京外国語大学）で学んだ二葉亭四迷、嵯峨の屋おむろらによるものが主であったが、一九〇四年ごろから嵯峨の屋の翻訳活動は減少し始め[40]、一九〇九年に二葉亭は急逝した。一九一〇年代に入り、昇、米川、中村ら三人を主としたロシア語原典からの翻訳時代が到来したのである。

平井は「かうして所謂英文科に籍をおきながら私は専らロシヤ文学に熱中しはじめた」[41]とはいえ、「その頃、昇曙夢氏が早稲田大学の講師として来ておられ、文科の必修科目以外にロシヤ語を教えておられたが、私はどういふものかまだロシヤ語を習う気にはならなかった」[42]と述べている。昇は、一九一六〜一七年の間、随意科目としての「露文学」を担当したが翌年廃止となり[43]、変わって第二外国語の「露西亜語」を担当していた[44]。当時の平井は、ロシア文学に「熱中」しても、ロシア語を学習する意欲はなかったのである。

現役のロシア文学翻訳者でもある昇の講義にさえ興味を抱かなかった平井に、大きな転機が訪れた。一九一八年三月、英文科教授の片上伸[45]が第一次ロシア留学から帰国したのである。早稲田大学文学部に露文科を創設するため、大学からロシアへ派遣されていた片上は生涯で二度ロシア留学を行った。本稿では一九一五年一〇月四日出発[46]、一九一八年三月二八日に帰国した[47]留学を第一次ロシア留学、一九二四年六月二四日出発[48]、一九二五年一〇月一日[49]に帰国したロシア留学を第二次ロシア留学と呼ぶことにする。

三月二八日に帰国した片上は、翌四月には英文科の教壇に立った[50]。「片上さんが教室で我々に話されるロシヤの話が、ロシヤ文学に熱中してゐた私には旱天の慈雨のやうに感じられたものだ」[51]という平井は、ロシア文学について、さらにロシアでの体験も聞きたくなり、片上の自宅を訪問するようになった。そして、片上から「ロシヤ文学がそんなに好きならロシヤ語を習つて原書についてみつちり研究しなければ駄目だといはれた。それまでまだ一度もロシヤ語を習はうといふ気にはならなかつたが、先生のこの一語が私の心に革命を起こしたのである」[52]。平井は一九一九年四月に新設される露文科へ再入学すべく、二年まで進級していた英文科をやめる決心をするとともに、ロシア語学習を開始した[53]。平井は予科一年をへて英文科へ進学し

たが、新制度の予科は二年に延長され[54]、本科で学びたい外国語を履修していた。すでに二年間ロシア語を学んできた学生たちと露文科で共に学ぶことを危惧したのである[55]。片上のことばは、平井にとって全く思いがけないことであった。だからこそ、ロシア文学を本格的に学ぼうとする大きな意欲をもたらしたのである。

平井は、ロシア語の発音は独学ではどうにもならかったため、新聞の三行広告で見つけた白系ロシア人からロシア語を習うことにした[56]。その時期は一九一九年一月ごろと考えられる[57]。平井にロシア語を教えたのは、麻布簞笥町に邸宅をかまえていた[58]、駐日ロシア大使館付海軍武官、ボリス・ペトローヴィッチ・ドゥードロフの妻の母親オリガ・ニコラーエヴナ・シュリギンであった[59]。

平井は、オリガのもとへ「一週二回づつ（ママ）夜七時から九時ころまで語学の稽古に通った」[60]。こうして、文法を独学で、発音をオリガから習った平井は一九一九年四月、新設された露文科へ再入学したのである。

しかし、平井の心配は杞憂に終わった。「予科から正式にロシヤ語の基礎教育を受けてきたはずの他の同級生の語学力が、私の予想に反して私のそれと大差ないことを発見して、ほつと安心したものである」[61]。それからの平井は、露文科の授業に励み、ロシア文学を読み、大学生活を謳歌した[62]。

平井によれば、当時の露文科の講義は、「片上先生の他に馬場哲哉[63]、八杉貞利[64]の両先生のおせわになつたが、そのうちにロシヤ人教師としてワノフスキイ老人[65]が迎へられた。このワノフスキイ老人が初めて私たちの教室に現はれた時、片言なりともロシヤ語でこの人と会話ができたのは全級中、かくいふ私一人だつた」[66]。そのため、「初めの数週間のあひだは私が教壇へ出て、この老教師と並で立つて通訳をつとめさせられ」[67]ることになった。一九二一年当時は、ドゥードロフ家に通い始めてすでに二年が経過していた。平井のロシア語会話は他の生徒たちよりもすぐれていたのである。平井は一九一九年と一九二〇年の夏、六月から三か月間にわたり、御殿場二ノ岡にある一家の別荘近くの、二ノ岡の神主をつとめていた内海家の離れを借りてもらい、一家とともに二夏を過ごした[68]。

山下氏によれば[69]、平井は一九二一年十月ごろ杉田栄之助の長女、静枝と結婚した。結婚後は神田川沿いのまかない付きの下宿に住みながら大学に通った。一九二二年八月には長女ユリヤが誕生した。平井が作成した一九二三年の年賀状の住所は「東京市外西ヶ原五五三」（現在の北区西ガ原）[70]となっている。一九二三年は平井が中退した年である。同年、片上は四月から七月にかけて、自身が編集を行った『ロシヤ研究』を春陽堂か

ら発行している[71]。片上は四月号で、編集後記に相当する「手帖の隅」欄に「『ロシヤ研究』は早稲田大学大学部のロシヤ文学の学生と卒業生と教師との協力で作る雑誌である」[72]と述べている。しかし、平井による執筆は掲載されていない。ロシア文学に熱心に取り組んでいた平井が執筆せず、露文科を中退した理由は不明である。同年九月一日には関東大震災が起こった。山下氏によれば[73]、御嵩町に滞在していた平井たちは無事であった。ドゥードロフ家は関東大震災以降、アメリカのサンフランシスコに移住した[74]。

平井に強い影響を与えた片上は一九二四年六月二四日、第二次ロシア留学へ出発した。早稲田大学を退職しての突然のロシア行きであった。片上が留学に発った経緯は諸説あるが[75]、真相は不明である。

四　まとめ

早稲田大学時代は、ロシア文学へと向かう道を平井に決定づけさせた。それは片上との出会いによるものであり、新設された露文科は平井を成長させる土台となった。さらに、ドゥードロフ家との出会いは貴重な体験となった。生きたロシア語にふれただけでなく、ロシアの上流階級に属していた一家の生活を垣間見られたことは、ロシア文学の翻訳を行うにあたり大いに役立てられたはずである。充実した学生生活を送っていた平井はしかし、中退に至った。理由は不明である。結婚、長女誕生に伴い大学から自然と足が遠のいただけでなく、ロシア語ができるようになったことで、露文科で学ぶ意義を見出せなくなっていったのではないだろうか。また、平井は長男であるにもかかわらず、実家を継がなかった。山下氏によれば[76]、結婚後も実家からの援助を受け、それは実家が没落した一九三二年ごろまで続いた。

平井が東京に出て、早稲田大学に学べたのは、実家が裕福であったからに他ならない。それは進学に伴う居住地の移動を可能にさせ、教育の機会を得ることにつながった。安定した経済事情があってこそ露文科に再入学することができたのである。

平井に関する研究がこれまで行われてこなかった経緯は、平井と交流のあった人物が存命しておらず、資料も少ないと考えられてきた点にあると思われる。しかし、山下氏はご健在であり、平井の足跡をたどる大きな手掛かりを与えて頂いた。研究は無理と見当をつけられ、放置された対象にも、探索の糸口が必ずあることがわかった。

平井が早稲田大学に在学した記録の確認や、中退に至る経緯など残された課題はあるものの、本稿は、小学校から早稲田大

学中退までの平井の学業時代をまとめ研究ノートとした。

註

（1）一九三四年に刊行された『ゴオゴリ全集』（ナウカ社、全六巻）の第一巻と第二巻の翻訳を担当したのを皮切りに、一九三八年～三九年にかけて刊行された『死せる魂』（岩波文庫、上中下巻）まで、『検察官』と『結婚』以外のゴーゴリ作品の翻訳を行った。

（2）秦野一宏「日本におけるゴーゴリ　ナウカ版全集（昭九）の出るまで」『ロシヤ語ロシヤ文学研究』第一五巻、一九八三年、一〇一頁。

（3）日本近代文学館編『日本近代文学大事典　第二巻』講談社、一九七七年、一〇二頁。平井の項目執筆は、横田瑞穂（一九〇四～一九八六）。横田は早稲田大学露文科を一九三〇年に卒業した。一九四九年から早稲田大学露文科教授。ゴーゴリ『死せる魂』、ショーロホフ『静かなドン』、ゴーリキー『母』などの翻訳がある。「横田瑞穂著作、翻訳年譜」『横田さんを偲ぶ夕べ』源貴志編、一九八八年、三～二八頁参照。

（4）山下ユリヤ氏から手紙を拝受したのは二〇一〇年三月九日から。山下氏は、ワープロ書院（シャープ）を長年愛用されている。手紙はワープロで作成されたものである。

（5）山下氏からの手紙、二〇一〇年三月一七日拝受。

（6）二〇一〇年五月二一日より。

（7）伊藤氏はインターネット上に「貴司山治net資料館」を開設している。

（8）貴司山治が編集長をつとめていた雑誌『婦人之世紀』は、大阪割烹学校校友会誌から発展して月刊化され、校友に配布、書店でも販売された。平井は一九二四年二月から同誌の編集に参加し、文芸欄にロシア文学の翻訳も行った。一九二四年七月ごろ、貴司から編集長を引き継ぐも、一九二五年九月腎臓病の悪化を理由に退社した。『貴司山治全日記ＤＶＤ版』不二出版、二〇一一年参照。『婦人之世紀』一九二四年四月号～一九二五年十一月号参照。

（9）不二出版、二〇一一年。

（10）『日本歴史地名大系第二一巻　岐阜県の地名』平凡社、一九八九年、二七八頁。

（11）前掲、手紙、三月一七日拝受。

（12）炭治郎は、谷汲村の区長を一九一六年～一九年、一九二八～三二年の二期に渡ってつとめた。平井國男『谷汲村名礼を語る』非売品、一九八五年、七六頁。

（13）「永久保存版明治三十八年度谷汲尋常小学校卒業者名」名簿に

は、「平井肇　卒業後の進学先　揖斐尋常高等小学校高等科」と記載されていた。

(14) 揖斐尋常高等小学校は、一八七六年に開校された協同義校を前身とする。いくつかの改編をへて一八八九年揖斐尋常高等小学校と改称された。岐阜県揖斐郡教育会編纂『揖斐郡志』六三五頁参照。

(15) 谷汲村編『谷汲村史』谷汲村、一九七七年、二八九頁。

(16) 前掲、手紙、三月一七日拝受。

(17) 岐阜地方裁判所管内御嵩地区裁判所は、一八七四年に設置された。『角川日本地名大辞典　21　岐阜県』一八五八頁。

(18) 「大正時代の御嵩の家並み地図」御嵩町史編さん室編『御嵩町史　通史編　上』一九九二年、四〇八頁。

(19) 平井肇「ロシヤ語二十五年」『藝文』藝文社、一九四三年四月号、（復刻版、ゆまに書房、二〇〇八年）一五〇頁。

(20) 同前、一五〇頁。

(21) 同前、一五〇頁。

(22) 同前、一五〇頁。

(23) 同前、一五〇頁。

(24) 同前、一五〇頁。

(25) 前掲、手紙、三月十七日拝受。

(26) 平井、前掲書、一五一頁。

(27) 『早稲田大学文学部百年史』早稲田大学第一・第二文学部発行、一九九二年、二三九頁。

(28) 同前、二三九頁。

(29) 相馬昌治（御風）（一八八三〜一九五〇）　新潟県生まれ。一九〇六年早稲田大学文学部哲学科卒業。詩歌や評論なども行った。『日本近代文学大事典　第二巻』講談社、二五五頁。

(30) 吉江喬松（一八八〇〜一九四〇）　長野県生まれ。一九〇五年早稲田大学英文科卒業。一九一〇年早稲田大学英文科講師。一九一六年、仏文科創設のためにフランスに派遣される。一九一八年帰国。早稲田大学仏文科主任教授として文学原論、フランス文学史、古典劇などを講義した。同前、四六八〜四六九参照。

(31) 昇曙夢（本名、直隆）（一八七八〜一九五八）　鹿児島県奄美大島生まれ。一八九六年正教神学校入学、一九〇三年卒業。母校の講師となる。一九〇四年にかけてゴーゴリの文語体の評伝、『露国文豪　ゴーゴリ』を刊行。一九〇七年『露西亜文学研究』。一九〇八年翻訳集『白夜集』。ゴーリキー、クープリン、ドストエフスキー、ソログーブ、マヤコフスキーなど多数の翻訳を行った。戦後は奄美の日本復帰運動に尽力した。同前、三七頁参照。

(32) 前掲書『早稲田大学文学部百年史』七一八頁。

(33) 平井、前掲書「ロシヤ語二十五年」一五一頁。

(34) 米川正夫（一八九一〜一九六五）　岡山県高梁町生まれ。一九一二年東京外国語学校露語部卒業。一九四六年四月早大文学部専任講師、のち教授。一九六一年三月定年退職。河出書房『ドストエーフスキー全集』、ツルゲーネフ『父と子』、トルストイ『アンナ・カレーニナ』、『戦争と平和』など、幾編もの翻訳を成就している。前掲、『日本近代文学大事典　第三巻』四九五頁参照。

(35) 中村白葉（一八九〇〜一九七四）　兵庫県生まれ。一九一二年東京外国語学校露語部卒業。同年鉄道院に就職。一九一四年忠誠堂の雑誌「中央文学」の編集にたずさわり、一九一五年ロシア語から初の直接訳『罪と罰』を翻訳。一九三三年『トルストイ全集』を米川正夫と共に翻訳。ソログーブ、チェーホフ、レ

ールモントフ、アルツイバーシェフなど多数の作品を翻訳した。前掲、『日本近代文学大事典　第三巻』五三八頁参照。

(36) 平井、前掲書「ロシヤ語二十五年」一五一頁。

(37) 昇直隆（曙夢）『露国文豪　ゴーゴリ』春陽堂、一九〇四年。

(38) ダスタエーフスキイ作、米川正夫訳『白痴1』新潮社、一九一四年。

(39) ダスタエーフスキイ作、中村白葉訳『罪と罰』上下巻、新潮社、一九一八年。

(40) 嵯峨の屋おむろは、一八九六年に国民新聞社を辞してから著述に専念した。小説の執筆のほかにトルストイ、ツルゲーネフ、レールモントフの翻訳を行った。一九〇四年に大本営幕僚事務扱となってからは、小説の執筆、翻訳数はこれまでより減少した。杉崎俊夫『嵯峨の屋おむろ研究』双文社出版、一九八六年、三〇五〜三三二頁参照。

(41) 平井、前掲書「ロシヤ語二十五年」一五一頁。

(42) 同前、一五一頁。

(43) 前掲書『早稲田大学文学部百年史』七一八〜七一九頁。

(44) 「大正五年九月に、文学部教科の第二外国語として露西亜語が新設された。この当時、大学部各科の中には第二外国語として、独語、仏語、支那語、実用英語（明治四四〜四一年までは実際英語）を配当しているものがあった。実用英語は学科配当表によると大正五年第一学年生より廃止されているが、この代わりにこの年から露西亜語が置かれ、担任講師として昇のほかに八杉貞利が嘱任されたのである。」前掲書『早稲田大学文学部百年史』七一九頁。

(45) 片上伸（一八八三〜一九二八）　愛媛県越智郡波止濱村生まれ。一八九九年東京専門学校（現・早稲田大学）入学。一九〇六年早稲田大学卒業。一九〇七年四月、早稲田大学予科講師。一九一〇年早稲田大学哲学科出身の桂井當之助の妹、朝子と結婚。同年より早稲田大学文学部本科教授。一九一五年一〇月、早稲田大学留学生としてロシアに赴く。一九一八年三月帰国。翻訳、評論を多数行った。片上伸『片上伸全集　第二巻』砂子屋書房、一九三八年、三九九頁参照。

(46) 「片上伸氏出発　早稲田大学教授片上伸氏は、四日午後東京駅出発露国留学の途につく由」東京朝日新聞、一九一五年一〇月四日、朝刊、五頁。

(47) 片上は一九一八年三月二八日に帰国した。東京朝日新聞、一九一八年三月二十九日、朝刊、五頁。

(48) 「片上伸氏　昨夕出発　さかんな見送りに露国へ」東京朝日新聞、一九二四年六月二五日、朝刊。

(49) 「帰朝した片上伸氏（けふ東京駅で）どつさり買つた書物抱へて　一年ぶりで露国から帰朝した片上伸氏　近く紀州の田舎にこもる」東京朝日新聞、一九二五年一〇月一日、夕刊、二頁。

(50) 「大正七年四月　帰朝、直ちに母校の教壇に立つ。」片上、前掲『片上伸全集　第二巻』巻末年表、片上晨太郎作成、三九九頁。

(51) 平井、前掲「ロシヤ語二十五年」一五二頁。

(52) 同前、一五二頁。

(53) 同前、一五二頁。

(54) 「早大の予科延長　高等予科の修行年限を二年に延長」東京朝日新聞、一九一七年二月二四日、朝刊、五頁。

(55) 平井、前掲書「ロシヤ語二十五年」一五三頁。

(56) 「初歩とはいへ、ロシヤ語を全然自分一人で独習しやうといふのだから、特に発音に至つては一体どう発音したらよいのか皆目見当もつかない始末だつた。それで誰かについて教へを受け

たいと思つてゐた時、はからずも新聞の案内欄で、或るロシヤ婦人が露語と仏語の個人教授をするといふ三行広告を発見した。そこで麻布の箪笥町に住んでゐるその婦人を訪ねて行つた。」同前、一五三頁。

(57)「学年はじめまで三箇月間にせめて基礎知識だけでもつけておかうものと躍起になつて勉強をはじめた」。露文科は一九一九年四月に新設されたため、三ヶ月前は同年一月となる。同前、一五三頁。

(58) ドゥードロフ家の当時の住所は「麻布区箪笥町六十二」となっている。JACAR（アジア歴史資料センター）、C11080355200「大正十一年一月三十日第三十号「オステン、サケン」大佐に対する勲記の件」参照。

(59) 前掲、一五三頁。

(60) 平井肇「ドゥードロフ家の人々」『書物展望』書物展望社、一九三六年、第六巻二号、通巻第五六号、七七頁。

(61) 平井、前掲書「ロシヤ語二五年」一五三頁。

(62)「学校では、プーシキンの流暢な文章に酔ひ、ゴーゴリの難解な章句に苦しみ、ドストイエフスキイの深刻な描写に心を暗くし、ツルゲーネフの甘美な情緒に感傷をそそられて、ロシヤ文学がますます好きになつて行つた。就中ツルゲーネフとチエーホフとに最も傾倒した。」同前、一五五頁。

(63) 馬場哲哉（一八九〇〜一九五一）　福島県生まれ。一九一四年に東京外国語学校（現・東京外国語大学）露語部を卒業後、早稲田大学文学部英文科に入学、一九一七年卒業。早大英文科で第二外国語のロシア語の講師となる。外村史郎の名でも翻訳、評論を行う。一九四一年ソビエトに渡り、敗戦と共にシベリア抑留され、一九五一年に死去した。前掲、『日本近代文学大事典　第二巻』二一〇頁参照。

(64) 八杉貞利（一八七六〜一九九六）　東京生まれ。一九〇〇年東京帝国大学博言学科卒業。恩師上田万年の勧めによりロシア語学の研究に入り、一九〇一年ロシア留学、一九〇四年帰国後東京外国語学校（現・東京外国語大学）の教授となり、東大、早大講師を歴任した。前掲、『日本近代文学大事典　第三巻』三八九頁参照。

(65) アレクサンドル・ワノフスキイ（一八七四〜一九六七）　ハバロフスク軍管区隊長であった一九一九年、病気療養を理由に日本に入国した。一九二一年から一九四三年まで露文科の講師をつとめた。日本で死去した。ミーラ・M・ヤコベンコ、滝波秀子訳「夢追う人A・ワノーフスキー伝」『早稲田大学図書館紀要』第三八号、一九九三年五月、一〜一二頁参照。

(66) 平井、前掲書「ロシヤ語二十五年」一五四頁。

(67) 同前、一五四頁。

(68) 平井、前掲書「ドゥードロフ家の人々」『書物展望』書物展望社、七九頁。

(69) 前掲、手紙、三月一七日拝受。

(70) 山下氏からご提供頂いた平井の年賀状のコピー参照。二〇一〇年四月二六日拝受。

(71) 筆者は早稲田大学比較文学研究室に保存されている『ロシヤ文学』の四月号から七月号までを閲覧した。

(72)『ロシヤ研究』四月号、春陽堂、一九二三年、二七三頁。

(73) 前掲、手紙、三月一七日拝受。

(74) ポダルコ・ピョートル『白系ロシア人とニッポン』成文社、二〇一〇年、一二二頁。

(75)「（引用者註・片上伸）氏の今回のロシア行きの真相は最近氏の

一身上に頗る芳しくない問題が持ち上がつたので氏の予ての計画をこんなに早めたので一部に伝えられてる様な対学校との問題は少しもないが、文科の少壮教授や学生連中は氏の日頃の官僚的な専横振りに非当な反感を抱いていたのでロシア文学科の極少数人を除いては一同氏の離職を痛快がつてゐる。」一九二四年六月二四日東京朝日新聞、一一頁。

(76) 前掲、手紙、三月一七日拝受。

（かない　みちこ／修士課程修了）